

2023年11月15日

日牟禮八幡宮・伏見稻荷大社 参拝報告

中標津支店 佐藤大介

日時 2023年11月3日(金曜日)～5日(日曜日)

同行者 幸田会長

阿部次長(帯広支店飼料課)、長谷川課長(北見支店肥料課)

飯泉上席課長代理(帯広支店肥料課)

11月3日(金曜日)

新千歳空港 8:50 発⇒伊丹空港 10:50 着

伊丹空港到着後、滋賀県近江八幡市へ移動、日牟禮八幡宮参拝

■日牟禮八幡宮(ひむれはちまんぐう)

滋賀県近江八幡市にある日牟禮八幡宮は、古くから近江商人の信仰を集めている。

誉田別尊、息長足姫尊、比賣神の三神が祀られている。伝承によれば、成務天皇元年(131年)、成務天皇が高穴穂の宮に即位の時、武内宿禰に命じてこの地に大嶋大神(大国主神)を祀ったのが草創とされている。持統天皇5年(691年)、藤原不比等が参拝し、詠んだ和歌「天降りの 神の誕生の八幡かも ひむれの柱に靡く白雲」に因んで比牟禮社と改められたと云われている。

正暦2年(991年)、一条天皇の勅願により、八幡山上に社を建立し、宇佐八幡を勧請して、上の八幡宮を祀った。寛弘2年(1005年)には、遥拝社を山麓に建立し、下の社と名付けられた。今回参拝した社殿にあたる。天正13年(1585年)には、豊臣秀次が八幡山城を築城するため、上の八幡宮を下の社に合祀。その代替地として、日杉山に祀りなおすこととなったが、天正18年(1590年)、秀次が領地替えにより、自身の居城を尾張国清州城に移したため、移転作業は行われず、次代の城主として京極高次が入るが、文禄4年(1595年)に前城主であった秀次が高野山で自害し、秀次ゆかりの八幡山城は廃城となり、高次は大津城に移った。このため、日杉山への社殿の移転は全面中止とされ、現在のように一社の姿となった。八幡山城は廃城となったが、城下町は近江商人の町として発展し、遥拝社はその守護神として崇敬を集めた。

慶長5年(1600年)、徳川家康が、関ヶ原の戦いの後に、武運長久の祈願を込めて参詣し、御供領五十石の地を寄附。後に、徳川家光や家綱も参詣し、御朱印を下している。

明治9年(1876年)には郷社、大正5年(1916年)には県社に列せられる。昭和41年(1966年)には神社本庁の別表神社に加列され、神社名は日牟禮八幡宮と改称された。



日牟禮八幡宮 正門



楼門



本殿

■近江商人

中世から近代にかけて、めざましく活動した近江国（現在の滋賀県）出身の商人のこと。大坂商人、伊勢商人と並ぶ日本三大商人の1つ。現在でも、俗に滋賀県出身の企業家を近江商人と呼ぶことがあるが、近江国外に進出して活動した商人のことを言い、近江全域から万遍なく商人が生まれたわけではなく、偏りがあり、地域によって活動時期・進出地域・取り扱い品目などに違いがあり、高島・八幡・湖東・日野の4地域で分類される。近江商人出身の企業は、伊藤忠、丸紅、双日、兼松などの商社やトヨタ自動車、高島屋、ワコール、日本生命など有名企業がある。江戸時代中期には、世界最高水準と言われる複式簿記が確立され、現在のチェーン店の考えに近い出店・枝店の積極的な開設など、近江商人の商法は徹底した合理化による流通革命だったと評価されているようです。近江商人の起源ははっきりわかっておらず、室町時代から安土桃山時代に発達した楽市楽座を起源とする説、文化都市である京都や商業都市である大阪に近い近江国は、東海道、北陸道、中山道、西近江路など沢山の交通網があり、全国各地に行商に赴くことが出来たという交通要衝説など諸説あり、どの説も近江商人の起源と考えられる。

■近江商人の気風・商売哲学

商人に必要なものは、「才覚」と「算用」と言われているが、近江商人は、巧妙な計算や企てをよしとせず、世の中の需要と供給を調整することを根本としている。才覚と算用に、「始末」を加えて、吉田守氏が揮毫され、当社各支店に飾られていることに紐付けられた。

①【三方良し】

「三方」とは、売り手・買い手・社会全体のこと。売り手の都合だけで商いをするのではなく、買い手が心の底から満足し、商いを通じて、地域社会の発展や福利の増進に貢献しなければならない、という考え。伊藤忠商事創業者の伊藤忠兵衛が広めたと言われています。

②【始末してきばる】

「始末」とは、無駄にせず儉約すること。単なるケチではなく、高価なものでも本当に良いものであれば長く使い、長期的視点で物事を考えること。「きばる」とは本気で取り組むこと。また、一度で大きな利益を得ることを忌み、「薄利多売」で長期的な商いをするを求めている。近江商人はまた、財の豊かさに見合う人格や教養、礼儀作法が求められ、奢ることは身を滅ぼす、という「質素儉約」も徹底していたようです。

③【利真於勤】

利益はその任務に懸命に努力した結果に対する「おこぼれ」に過ぎない、という考え方。

④【陰徳善事】

人知れず善い行いをする。自己顕示や見返りを期待せず、人のために尽くすこと。

⑤【押込隠居】

先祖の苦勞の賜物で今日の繁栄がある。主人としてわずか 30 年ほど奉公する身と思い、家業を守り子孫に商いの繁栄を託すこと。店の運営でも、店と個人(主人)は別々であり、店の財産は主人の私有財産ではなく、独断で物事を決めてはならない。現在で言う、会社の「取締役会」が当時から存在したことがわかる。主人不適格な人物には追放や相続権の剥奪も。

⑥【武士は敬して遠ざけよ】

地域経済を左右する豪商になると、大名との付き合いも多くなり得るが、近江商人はそういった権力に依存して利益を得ることをよしとしない。

この日は祝日であり、たくさんの参拝客が訪れていた。幸田会長より「神様は、参拝者が沢山訪れるために、誰が誰だか分からない。会社と所属、名前を心の中で唱えて参拝する。」ことを教えていただき、各自、下の杜にて参拝。参拝後、八幡山を登る。



八幡山山頂にて ※後ろのオブジェが微妙。

日牟禮八幡宮参拝後、京都へ移動、京都市内泊

11月4日(土曜日)

京都府京都市 伏見稲荷大社参拝

■伏見稲荷大社

京都盆地東山三十六峰最南端の霊峰 稲荷山の西麓に鎮座しており、全国に約3万社あるといわれる稲荷神社の総本社です。稲荷信仰は、稲荷山の3つの峰を神そのものとして崇拝されたことを源流とする。当初は農耕の神として祀られ、のちに殖産興業の性格が加わり、一般大衆庶民の篤い信仰を受けた。清少納言が、自らの稲荷詣を『枕草子』に記し、『蜻蛉日記』『今昔物語集』など古典によく登場する。平安時代には、東寺の造営にあたって同社は鎮守神となると、次第に神位を高めて名神大社に列し、天慶5年(942年)には正一位の極位を得た。その後、源頼朝や足利義教らが社殿の造営・修造に関わったが、1467年の応仁の乱にて全て焼失した。その後、社僧による勧進の下で再建が始まり、明応8年(1499年)に遷宮を迎える。江戸時代には、稲荷神の崇敬は朝廷の他、町人や商人によって行われた。特に、商いの成功を祈る商人に人気があり、狐が棲む穴洞を見つけては、稲荷神を勧請する者まで現れたそう。明治時代には、崇敬者による鳥居の奉納や私的なお塚の建立が稲荷山中で顕著化し、現在の伏見稲荷大社を特徴づけるものとなりました。



大鳥居



楼門



千本鳥居入口



本殿のそばにて

伏見稲荷大社でも、前日の日牟禮八幡宮で参拝した際と同様に、各自が会社名と所属、名前を心の中で唱えつつ、商売繁盛と当社の繁栄、特に皆様の健康を祈りました。

参拝後、稲荷山を登る。一ノ峰、二ノ峰、三ノ峰にある各神蹟を参拝。下山中に、業者が新規の鳥居の設置作業をしていた。鳥居をよく見ると、京都や大阪の関西だけでなく、東京、全国各地の個人や企業が、大小様々な鳥居を奉納していることが分かった。また、木造りでなく、石造りの古い鳥居に刻まれた年月は明治、大正期であり、ご芳名を調べると、当時の大地主や豪商と云われる方々だったことが強く印象に残りました。



一ノ峰(上之社神蹟)



三ノ峰(下之社神蹟)

※二ノ峰(中之社神蹟)の写真は撮り忘れてしまいました…。

伏見稲荷大社参拝・稲荷山を下山後、大阪へ移動。大阪市内泊

11月5日(日曜日)

伊丹空港 11:35 発 新千歳空港 13:20 着

到着後解散

■最後に

この度、幸田会長よりお誘いをいただき、日牟禮八幡宮と伏見稲荷大社へ参拝に伺いました。

近江商人のことは知っていましたが、どういった商人なのか知らず、その商売哲学を知り、実際に日牟禮八幡宮を訪れ、あちこちに近江商人の気風や商魂、功績が称えられており、あらためてそういう商人だということを認識しました。

私は2005年4月に入社しました。仕事に慣れ始めた頃に、当時のある上司が何気なく言われたことがまさに『三方良し』でした。解釈というか、対象が少し異なりますが、『お客様、自分(当社)、仕入先・運送会社が満足する仕事をしよう』という言葉でした。これは今でも念頭に心がけて行動しており、どれか一つが満足できないと成立しないし、商売は続きません。今回の参拝を機に、初心を思い改めさせられました。今後も『三方良し』の行動を心がけて行動いたします。

伏見稲荷大社では、コロナ禍前の日常が戻ったようで、日本人よりも外国人のほうが多かったように感じました。さきに書きましたが、特に健康を強く願いました。健康でなければそもそも生きられません。こういったところにも来られません。再訪できるように健康に留意し、業務に邁進いたします。

貴重な機会をいただき、たいへんありがとうございました。